

ワークショップI「藻類の和名について考える」参加記

鈴木雅大

日本藻類学会第39回大会3日目の2015年3月22日、ワークショップI「藻類の和名について考える」が開催され、微細藻・淡水藻・海藻・気生藻の専門家の方々による講演と意見交換が行われた。

慶應大学の仲田崇志先生は、生物の和名の付け方について日本魚類学会や日本変形菌研究会を例に挙げて紹介された。藻類において、微細藻類や淡水藻類では和名の整理が進んでいないことを説明され、藻類学会での和名提唱の場を作る事やガイドラインの作成を提案された。

国立科学博物館の北山太樹先生は、海藻の和名について講演され、海藻ではほとんどの種に和名が付いており、藻類の中では和名の運用がうまくいっていること、仮名遣いの問題など、表記に揺れのある和名（本誌第56巻第3号pp. 233-236参照）、今後、新たに和名を付ける際に注意が必要となるものを紹介された。

神戸大学の坂山英俊先生は、車軸藻類の和名について講演され、日本産80種全てに和名があること、蜘蛛と間違えられる事などを紹介された。

東京大学の野崎久義先生は、車軸藻 *Nitella* 属の和名として「フラスモ」と「フラスコモ」の2つがあることを紹介された他、美しい和名の例として緑藻シアワセモ *Tetrabaena socialis* と車軸藻ホシツリモ *Nitellopsis obtusa* を紹介された。

東京学芸大学の真山茂樹先生は、珪藻の和名について講演され、珪藻では属レベルでの和名がほとんどで、374属に和名があるのに対し、種レベルではズキケイソウなどごくわずかであること、種レベルでの和名の命名方法として1名法と2名法があることを紹介された。

広島大学の半田信司先生は、気生緑藻スミレモ類の和名について講演され、スミレモ類の和名の現状と、誰のため

の和名か、和名の安定性と変更における課題について紹介・提示された。

岩国市立ミクロ生物館の末友靖隆先生の講演（国立環境研究所の河地正伸先生が代理で講演）では、「日本の海産プランクトン図鑑（共立出版、2011年）」において、全172種に和名を付け、和名の命名に際し一定の基準を設けたこと、和名を付けたことにより、主に小中高・一般の方々のプランクトンに対する興味・関心が向上したことなどを紹介された。また、藻類の和名命名の普及に向けて、専門家と非専門家によるワーキンググループの藻類学会内での立ち上げを提案された。

講演後、参加者による活発な意見交換が行われた。和名の必要性について、微細藻類のような顕微鏡レベルの生物に対して種レベルでの和名は必要か、大型藻類であっても生態的に関心の低いものに和名が必要かなどの鋭い意見もみられ、和名に対する考え方や歴史的背景・慣習が分類群や専門家によって様々であることがうかがえた。今後の方針として、和名提唱の場の提供や、和名の付け方におけるガイドラインの作成、ワーキンググループの立ち上げなどを藻類学会として行っていくことが提案された。

ワークショップを通して、各分類群における和名の現状と課題を知ることができ、和名の命名、運用について大いに勉強になった。提案された事項の取りまとめ、実行には更なる意見交換・議論が必要になると思われるが、将来的に和名を通じて藻類の教育・普及が広がることが期待される。

最後に、ワークショップの講師を務めて頂いた先生方、世話人としてワークショップの準備をしてくださった河地先生に心から感謝の意を表す。

（神戸大学）



ワークショップIの講演と参加者（写真提供：河地正伸氏）